

口絵 ハッサンケイフ・ホユック遺跡（トルコ共和国）出土骨製品

| | |
|----------|---|
| 著者 | 三宅 裕 |
| 雑誌名 | 筑波大学先史学・考古学研究 |
| 巻 | 25 |
| 発行年 | 2014-03 |
| その他のタイトル | A Bone Artifact from Hasankeyf Hoyuk, Turkey |
| URL | http://hdl.handle.net/2241/00149864 |

口絵



写真1 ハッサンケイフ・ホユック遺跡出土骨製品



写真2 骨製品出土状況

ハッサンケイフ・ホユック遺跡（トルコ共和国）出土骨製品

ハッサンケイフ・ホユック遺跡は、トルコ共和国南東部のティグリス川上流域に位置する新石器時代を中心とする遺跡である。筑波大学アナトリア調査団は、2011年より現地のバットマン大学との共同で、この遺跡の発掘調査を実施してきた。紀元前10千年紀後半に営まれた遺跡であり、先土器新石器時代の初頭にあたるPPNA期に年代付けられる。ティグリス川上流域では、今のところ確認されている最古の定住集落である。

発掘調査では半地下式の構造をした円形遺構が数多く検出されたが、テルの頂上部からは矩形プランの大型遺構も確認された。この第3号遺構も半地下式の構造であるが、1辺の長さが約9mにもなる規模の大きなもので、床面からは原位置で板状の石柱が出土し、床下からは30基以上の埋葬も検出された。石柱をとまなう建物は南東アナトリアの同時期の遺跡からも検出されているが、いずれも一般の住居ではなく、特別な建物であると考えられている。ハッサンケイフ・ホユックから検出されたこの建物も、そこで儀礼などが執り行なわれた公共的建築物としての性格をもつものであったと考えることができる。

この骨製品（写真1）は、大型矩形遺構から検出された埋葬人骨にもなって出土した。人骨は顔を下に向けた俯せの状態で見つかり、両足は大きく後方に投げ出され、反り返った状態であった。骨製品は右前腕部の骨の上から出土し、その位置関係から判断すると、おそらく腕の内側に装着されたままの状態であったと考えられる（写真2）。矢を射る際に弦が腕に当たるのを防ぐ鞆のような役割を果たした可能性も考えられるが、定かではない。いずれにしても、腕に装着するものであったことが判明した意義は大きいと言える。骨製品自体はへら状の形状をしており、手首側の端部が尖り、そこに穿孔が認められる。表面には刻文による装飾で、2体の動物（昆虫？）が背中を接するような形で描かれている。よく似たモチーフは、ティグリス川上流域に位置する同時期の遺跡キョルティック・テベでも知られているが、こちらは石製品に浮き彫りによって描かれている。今のところ何を表現したものか特定できないため、想像上の動物と解釈することもできるが、まったく同じ図像が他の遺跡との間で共有されていたことからすると、実際に存在する具体的な動物の姿を描いたものであった可能性が高い。これとよく似た骨製品はハッサンケイフ・ホユックからもう1点出土しており、そちらにはサソリが刻まれている。

三宅 裕